

## 第2章

### パラリンピアンに対する社会的認知度調査

#### 調査概要

##### (1) 調査目的

平昌 2018 パラリンピック大会の開催、東京 2020 パラリンピック大会の開催を控え、パラリンピアンに対する社会的認知度を測定する。前回調査との比較を行い、変化、傾向、要因などを調査する。

##### (2) 調査内容

主な調査内容は以下のとおりである。

- ・パラリンピアンの社会的認知度
- ・平昌 2018 パラリンピック大会の視聴状況
- ・日常生活におけるスポーツ環境

##### (3) 調査対象

全国の市町村に在住する 20 歳以上の男女

##### (4) 調査期間

2018 年 6 月 28 日 (木) ~2018 年 6 月 29 日 (金)

##### (5) 調査方法

インターネットによるウェブ調査  
当財団調べ (マクロミルモニタを利用)

(6) 回答結果

東日本エリア/男性/20代	103	西日本エリア/男性/20代	103
東日本エリア/男性/30代	103	西日本エリア/男性/30代	103
東日本エリア/男性/40代	103	西日本エリア/男性/40代	103
東日本エリア/男性/50代	103	西日本エリア/男性/50代	103
東日本エリア/男性/60代以上	103	西日本エリア/男性/60代以上	103
東日本エリア/女性/20代	103	西日本エリア/女性/20代	103
東日本エリア/女性/30代	103	西日本エリア/女性/30代	103
東日本エリア/女性/40代	103	西日本エリア/女性/40代	103
東日本エリア/女性/50代	103	西日本エリア/女性/50代	103
東日本エリア/女性/60代以上	103	西日本エリア/女性/60代以上	103

回答者数：2,060人

(7) 調査報告並びにトピック内に示した図表の注意事項

クロス集計においては、原則 x2 検定分析による有意差検定で処理して、有意水準 1% を ▲▼、5% を △▽、10% を ∴∴∴ で表示するとともに、有意差が認められない場合には非表示とした。

要約

- ◆ リオ大会に出場したパラリンピアン の 2 年経過後の認知度は減少傾向で、第 1 位の「国枝慎吾」は 5.3 ポイント減の 28.7%、第 2 位の「上地結衣」は 1.4 ポイント減の 13.4%、3 位の「成田真由美」は 1.0 ポイント減の 9.5% であった。
- ◆ 平昌大会に出場したパラリンピアン の認知度は、最も知られている選手が「成田緑夢」(50.9%)、ついで「村岡桃佳」(9.6%)、「南雲啓佑」(9.0%)、「山本篤」(6.9%)、「新田佳浩」(4.9%) であった。
- ◆ 実施競技の正答率が高かったのは「成田緑夢(スノーボード)」(84.1%) で、ついで、「村岡桃佳(アルペンスキー)」(48.0%)、「森井大輝(アルペンスキー)」(25.0%)、「新田のんの(クロスカントリー/バイアスロン)」(23.0%)、「狩野亮(アルペンスキー)」(22.5%) であった。
- ◆ 平昌大会の観戦形態は、「テレビのニュース番組で観た」が 45.6% で最も多く、ついで、「テレビで中継番組を観た」(32.8%)、「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」(11.2%) であった。いずれかの観戦形態で、観戦した競技は、「スノーボード」(49.8%) が最も多く、ついで「アルペンスキー」(34.7%)、「クロスカントリー/バイアスロン」(16.7%) であった一方、「わからない」が 28.5% であった。
- ◆ 平昌大会を観戦した感想は、「アスリートとして非常に優れていると感じた」(69.5%) が最も多く、ついで、「障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた」(65.6%)、「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」(61.5%) であった。「2020 年東京パラリンピックを直接観戦したい」は 35.2% であった。
- ◆ 「自分以外の身近な人に障害者がいる」と回答した人では、「テレビで中継番組を観た」「テレビのニュース番組で観た」「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」「(テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した」が有意に高かった。
- ◆ 「自分以外の身近な人に障害者がいる」と回答した人では、「障害者スポーツを直接観戦したい」「障害者スポーツを体験したい」「障害者スポーツのボランティアをしたい」が有意に高かった。
- ◆ 日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景をみることがあるかについて、みることがある人の方が、特にインターネット動画の観戦形態において有意に高かった。

## 調査報告

### 1. リオ大会出場のパラリンピアン認知度

前回調査（2016年度調査）に引き続き、リオ大会に出場した選手を対象に調査を実施した。大会終了後、2年が経過した2018年度時点での選手の認知度について、経年での変化をみた。「知っている」「聞いたことがある」を合わせた認知度において、前回調査第1位であった「国枝慎吾」は5.3ポイント減、同2位の「上地結衣」は1.4ポイント減、同3位の「成田真由美」は1.0ポイント減であった（表1-1）。前回調査より認知度が上がった選手は、前回調査4位の「一ノ瀬メイ」（0.4ポイント増）、同6位の「山本篤」（2.7ポイント増）の2名だけで、それ以外の選手は、総じて前回調査よりも低い傾向を示した。

表 1-1 リオ 2016 パラリンピック出場選手の認知度と正答率（上位 20 位）

※前回比:「知っている」+「聞いたことがある」の差 全体(N) 2060

NO	氏名		知っている	聞いたことがある	前回比※	競技名	正答率
1	国枝 慎吾 (くにえだ しんご)	2018年	17.5	11.2	▲ 5.3	車いすテニス	77.9
		2016年	20.9	13.1			79.2
2	上地 結衣 (かみじ ゆい)	2018年	6.7	6.7	▲ 1.4	車いすテニス	63.0
		2016年	6.8	8.0			56.4
3	成田 真由美 (なりた まゆみ)	2018年	3.8	5.7	▲ 1.0	水泳	50.0
		2016年	5.4	5.1			60.8
4	一ノ瀬 メイ (いちのせ めい)	2018年	3.1	5.5	0.4	水泳	41.6
		2016年	1.9	6.4			32.4
5	辻 沙絵 (つじ さえ) ※	2018年	1.8	3.2	▲ 1.1	陸上競技	40.8
		2016年	2.4	3.7			40.8
6	山本 篤 (やまもと あつし)	2018年	2.1	6.2	2.7	陸上競技	25.1
		2016年	1.4	4.2			22.6
7	池崎 大輔 (いけざき だいすけ)	2018年	1.5	2.8	▲ 0.9	ウィルチェアラグビー	6.8
		2016年	1.2	4.0			17.8
8	別所 キミエ (べっしょ きみえ)	2018年	0.9	2.3	▲ 1.3	卓球	18.2
		2016年	1.8	2.6			44.6
9	藤本 怜央 (ふじもと れお)	2018年	0.7	3.4	▲ 0.1	車椅子バスケットボール	1.2
		2016年	0.8	3.4			14.9
10	山田 拓朗 (やまだ たくろう)	2018年	0.9	1.9	▲ 1.4	水泳	7.0
		2016年	1.1	3.1			18.8
11	廣瀬 順子 (ひろせ じゅんこ)	2018年	1.0	2.5	▲ 0.3	柔道	16.7
		2016年	1.3	2.5			23.1
12	木村 敬一 (きむら けいいち)	2018年	0.9	2.6	▲ 0.2	水泳	15.3
		2016年	1.4	2.3			38.2
13	藤井 新悟 (ふじい しんご)	2018年	0.6	2.4	▲ 0.6	車椅子バスケットボール	9.5
		2016年	1.0	2.7			14.5
14	鈴木 徹 (すずき とおる)	2018年	1.0	2.4	▲ 0.2	陸上競技	13.0
		2016年	0.7	2.9			9.5
15	池 愛里 (いけ あいり)	2018年	0.6	2.6	▲ 0.3	水泳	12.1
		2016年	0.9	2.6			19.2
16	道下 美里 (みちした みさと)	2018年	1.0	1.8	▲ 0.7	陸上競技	22.4
		2016年	1.9	1.6			51.4
17	正木 健人 (まさき けんと)	2018年	0.8	2.1	▲ 0.5	柔道	1.7
		2016年	0.9	2.5			26.8
18	浦田 理恵 (うらた りえ)	2018年	0.7	2.1	▲ 0.3	ゴールボール	10.2
		2016年	0.8	2.4			18.5
19	廣瀬 誠 (ひろせ まこと)	2018年	0.6	2.2	▲ 0.3	柔道	10.5
		2016年	0.5	2.6			20.3
20	瀬立 モニカ (せりゅう もにか)	2018年	0.8	2.0	▲ 0.3	カーン	14.0
		2016年	0.8	2.2			7.9

※辻沙絵は2018年に結婚。現在の姓は重本(しげもと)

(%)

## 2. 平昌大会出場のパラリンピアン認知度

平昌大会に出場した選手を対象にした設問では、最も知られている選手は、「成田緑夢」であり、「知っている」「聞いたことがある」を合わせると、50.9%（知っている：29.2%、聞いたことがある：21.7%）であった（表 1-2）。ついで、「村岡桃佳」の 9.6%（知っている：3.6%、聞いたことがある：6.0%）、「南雲啓佑」の 9.0%（知っている：2.0%、聞いたことがある：7.0%）、「山本篤」の 6.9%（知っている：2.6%、聞いたことがある：4.3%）、「新田佳浩」の 4.9%（知っている：1.7%、聞いたことがある：3.2%）だった。

「知っている」「聞いたことがある」と答えた回答者を対象に実施競技についてたずねたところ、もっとも正答率が高かったのは、「成田緑夢（スノーボード）」（84.1%）、ついで、「村岡桃佳（アルペンスキー）」（48.0%）、「森井大輝（アルペンスキー）」（25.0%）、「新田のんの（クロスカントリー／バイアスロン）」（23.0%）、「狩野亮（アルペンスキー）」（22.5%）であった。

表 1-2 平昌 2018 パラリンピック出場選手の認知度と正答率（上位 20 位）

							(%)
NO	氏名	全体(N)	知っている	聞いたことがある	知らない	競技名	正答率
1	成田 緑夢 (なりた ぐりむ)	2,060	29.2	21.7	49.1	スノーボード	84.1
2	村岡 桃佳 (むらおか ももか)	2,060	3.6	6.0	90.4	アルペンスキー	48.0
3	南雲 啓佑 (なぐも けいすけ)	2,060	2.0	7.0	91.0	アイスホッケー	9.1
4	山本 篤 (やまもと あつし)	2,060	2.6	4.3	93.1	スノーボード	12.0
5	新田 佳浩 (にった よしひろ)	2,060	1.7	3.2	95.1	クロスカントリー/ バイアスロン	21.0
6	石井 英明 (いしい ひであき)	2,060	1.4	3.3	95.3	アイスホッケー	11.3
7	上原 大祐 (うえはら だいすけ)	2,060	1.5	3.2	95.4	アイスホッケー	11.6
8	小栗 大地 (おぐり だいち)	2,060	1.2	3.4	95.4	スノーボード	13.7
9	佐藤 圭一 (さとう けいいち)	2,060	1.5	3.1	95.4	クロスカントリー/ バイアスロン	11.7
10	阿部 友里香 (あべ ゆりか)	2,060	1.0	3.4	95.5	クロスカントリー/ バイアスロン	18.5
11	高橋 幸平 (たかはし こうへい)	2,060	1.3	3.1	95.6	アルペンスキー	12.2
12	福島 忍 (ふくしま しのぶ)	2,060	1.2	3.1	95.7	アイスホッケー	9.1
13	森井 大輝 (もりい たいき)	2,060	1.1	3.0	95.9	アルペンスキー	25.0
14	堀江 航 (ほりえ わたる)	2,060	0.8	3.1	96.1	アイスホッケー	17.3
15	狩野 亮 (かのう あきら)	2,060	1.2	2.7	96.1	アルペンスキー	22.5
16	須藤 悟 (すどう さとる)	2,060	1.0	2.7	96.3	アイスホッケー	21.1
17	新田 のんの (にった のんの)	2,060	1.3	2.3	96.4	クロスカントリー/ バイアスロン	23.0
18	鈴木 猛史 (すずき たけし)	2,060	1.0	2.6	96.5	アルペンスキー	17.8
19	夏目 堅司 (なつめ けんじ)	2,060	0.9	2.5	96.6	アルペンスキー	15.7
20	廣瀬 進 (ひろせ すすむ)	2,060	0.9	2.5	96.6	アイスホッケー	10.0

3. パラリンピックの観戦

1) 観戦形態

平昌大会をテレビやインターネットで観戦したかについてたずねたところ、「テレビのニュース番組で観た」が45.6%で最も多く、「観た」と回答したなかで多かったのは、ついで「テレビで中継番組を観た」(32.8%)、「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」(11.2%)であった(図 3-1)。前々回調査(2014 年度実施)、前回調査(2016 年度実施)からの経年変化をみると、「テレビで中継番組を観た」「インターネット動画で中継を観た」「インターネット動画でニュース番組を観た」「インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た」が増加傾向であった。

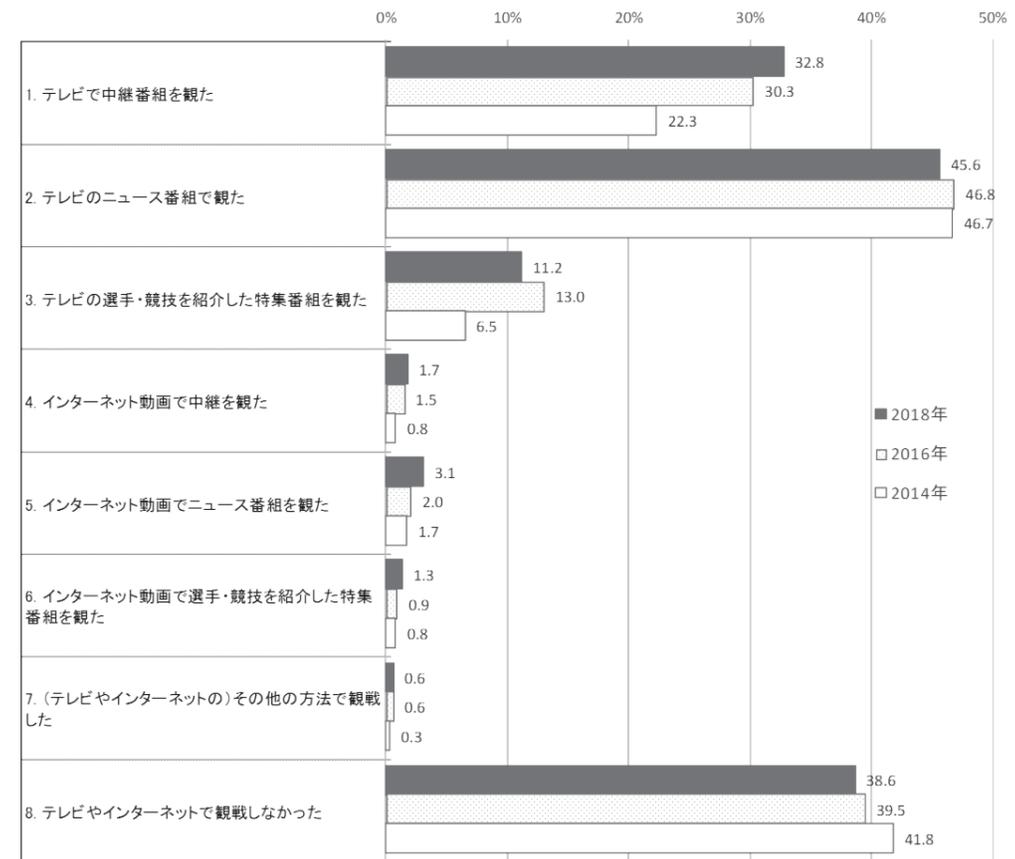


図 3-1 平昌 2018 パラリンピックの観戦形態

## 2) 観戦種目

テレビやインターネットで平昌大会を観戦した人のうち、観戦競技についてたずねたところ、「スノーボード」が49.8%で最も多く、ついで、「アルペンスキー」(34.7%)、「クロスカントリー/バイアスロン」(16.7%)、「アイスホッケー」(12.3%)であった(図3-2)。観戦した人の約半数が「スノーボード」を観ていた。「わからない」は28.5%であった。

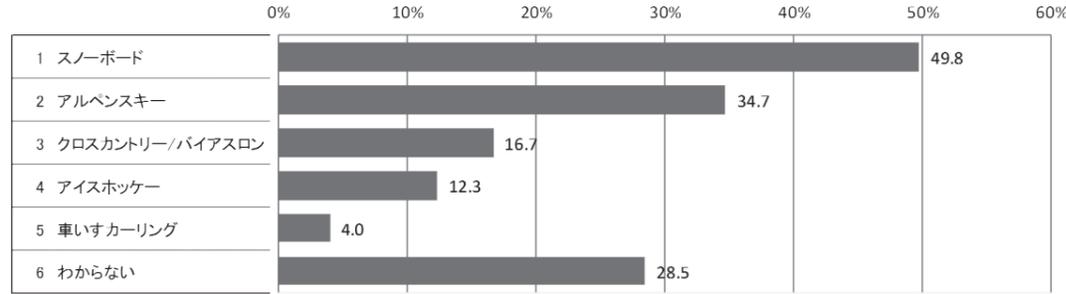


図3-2 平昌2018パラリンピックの観戦種目

## 3) 観戦後の意識変容

テレビやインターネットで平昌2018パラを観戦した人のうち、観戦した感想についてたずねたところ、最も多かったのが「アスリートとして非常に優れていると感じた」であった(図3-3)。「よく当てはまる」(29.5%)と「やや当てはまる」(40.0%)を合わせると約7割であった。ついで、「障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた」が65.6%(よく当てはまる:20.9%、やや当てはまる:44.7%)、「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」が61.5%(よく当てはまる:15.1%、やや当てはまる:46.4%)であった。「2020年東京パラリンピックを直接観戦したい」は35.2%(よく当てはまる:9.3%、やや当てはまる:25.9%)であった。前回調査と同様の傾向を示した。

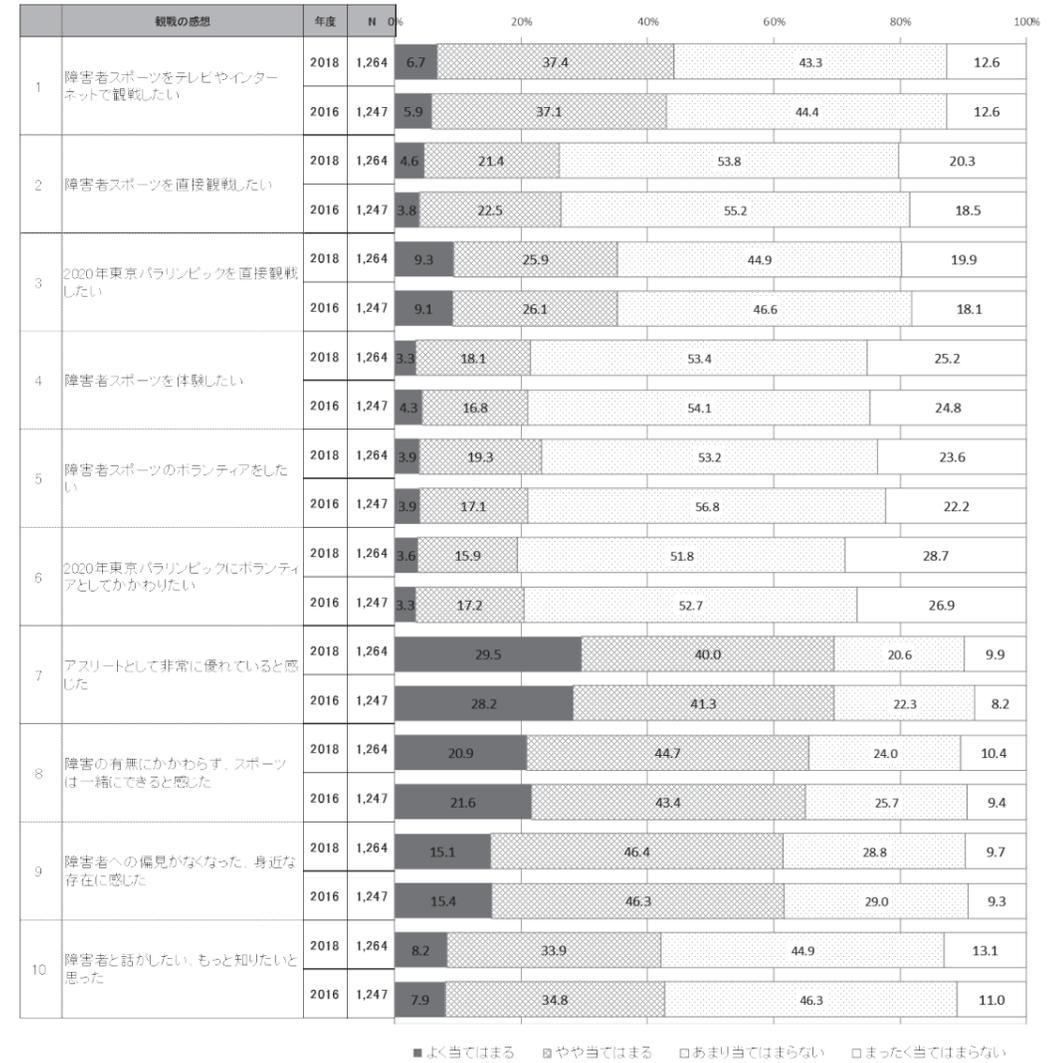


図3-3 平昌2018パラリンピック観戦後の意識変容

#### 4. スポーツとの接点

##### 1) 障害のない人がスポーツを行う光景

日常生活のなかで障害のない人がスポーツを行う光景をみることがあるかについてたずねたところ、「ウォーキング」(54.4%) が最も多く、ついで、「ジョギング・ランニング」(48.2%)、「サイクリング」(32.0%)、「野球(キャッチボールを含む)」(28.8%)、「サッカー(フットサルを含む)」(26.7%)、「体操(軽い体操、ラジオ体操など)」(26.4%)であった(図4-1)。前々回調査(2014年度実施)、前回調査(2016年度実施)からの経年変化をみると、「ウォーキング」「ジョギング・ランニング」「サイクリング」が減少傾向であった。

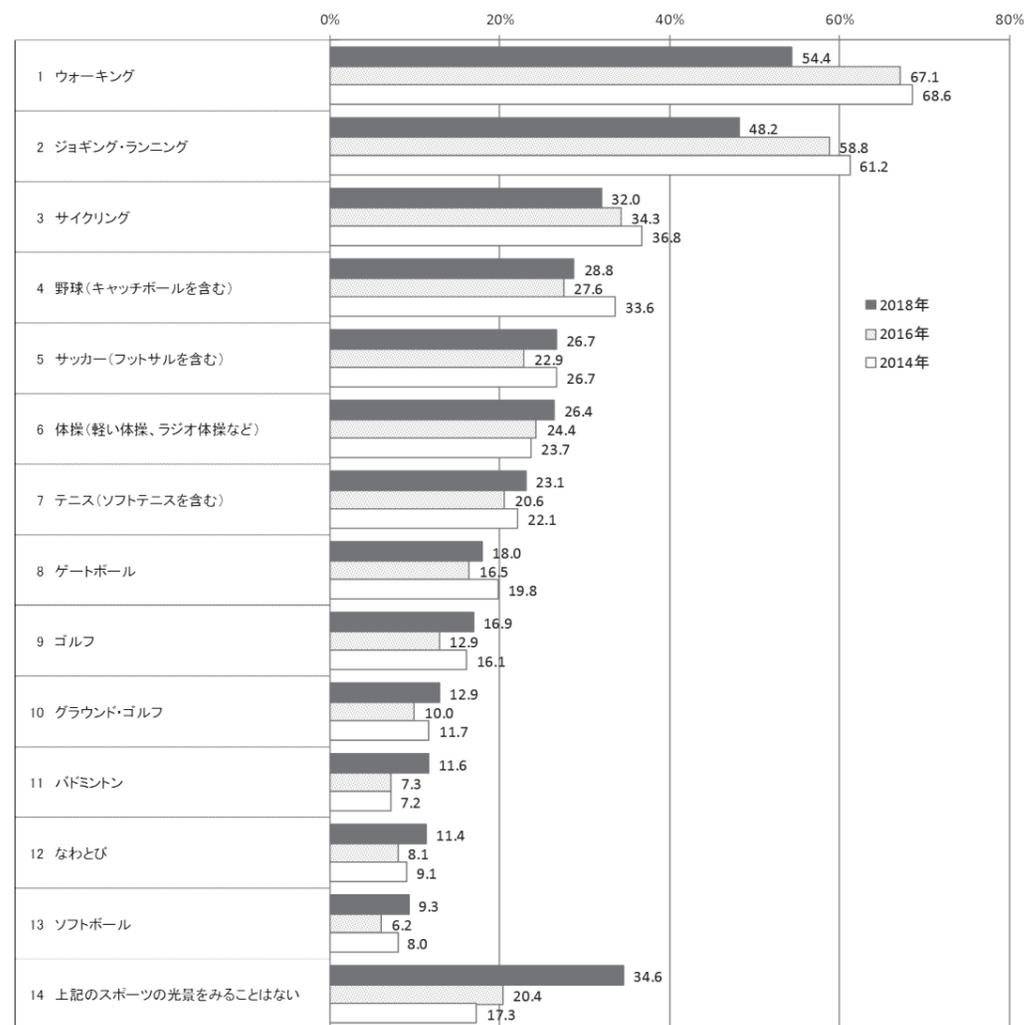


図4-1 日常生活のなかでみることがあるスポーツの光景

##### 2) 障害のある人がスポーツを行う光景・種目

日常生活のなかで、障害のある人がスポーツを行う光景をみることがあるのは、9.4%であった(図4-2)。そのなかで、みることがあるスポーツの種目は、「バスケットボール」が最も多く、ついで、「ジョギング・ランニング」「水泳」「サッカー」「テニス」であった(表4-1)。

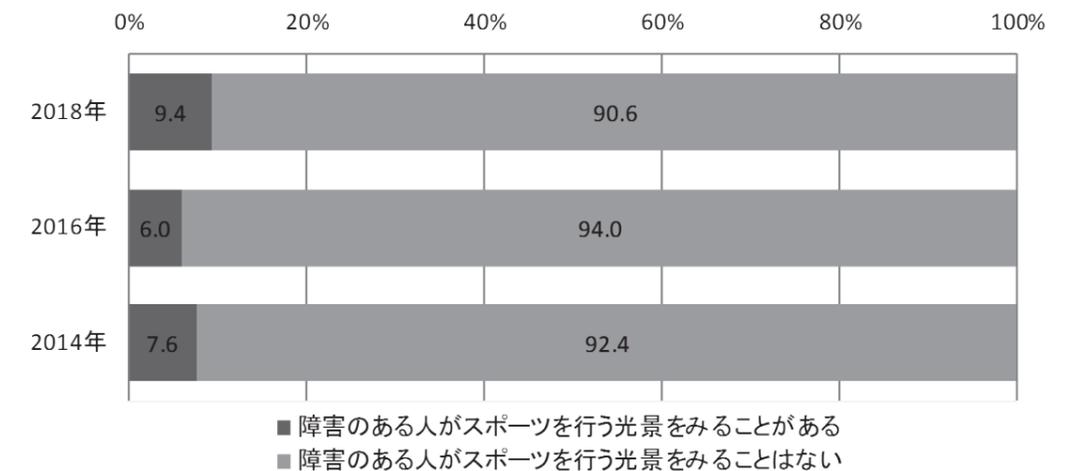


図4-2 障害のある人がスポーツを行う光景をみることがあることの有無

表 4-1 障害のある人がスポーツを行う光景でみる種目一覧

順位	2018年度(N=245)		2016年度(N=152)		2014年度(N=157)	
	種目	件数	種目	件数	種目	件数
1位	バスケットボール	48	バスケットボール	28	ジョギング・ランニング	51
2位	ジョギング・ランニング	36	テニス	21	バスケットボール	50
3位	水泳	19	ジョギング・ランニング	20	テニス	22
4位	サッカー テニス	18	サッカー	9	サッカー	16
5位			水泳	12		
6位	ウォーキング 陸上競技	17	陸上競技 水泳 ウォーキング	8	野球	11
7位					ウォーキング	9
8位	卓球	6	サイクリング	6	ゲートボール	6
9位	ゴルフ	5	ゲートボール 卓球	5	卓球	4
10位	ゲートボール スノーボード バドミントン フライングディスク	4			バレーボール	3

3) 身近にいる障害のある人

身近に障害のある人がいるかについてたずねたところ、「身近に障害のある人はいない」が76.6%で最も多く、ついで、「親族に障害のある人がいる」(10.6%)、「友人・知人に障害のある人がいる」(8.1%)であった。「自分自身が障害者である」は2.6%であった(図4-3)。

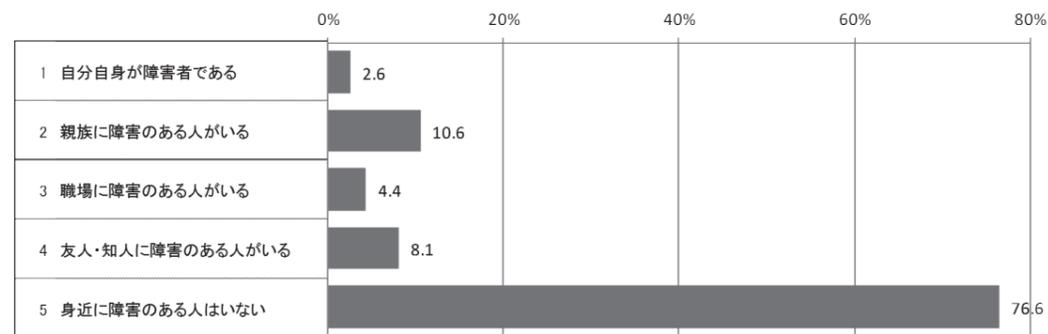


図 4-3 身近にいる障害のある人の有無

5. 二次分析

1) 性別、年代別にみる認知度

リオ大会に出場したパラリンピアンのうち、最も認知度が高かった「国枝慎吾」と、平昌大会に出場したパラリンピアンのうち、最も認知度が高かった「成田緑夢」について、性別、年代別に分析した。

「国枝慎吾」の認知度は、性別で見ると、男性が1%水準で優位に高かった。性別/年代別にみると、「男性 20 代」「男性 30 代」が1%水準で有意に高く、「女性 20 代」が1%水準で有意に低かった(表5-1)。

「成田緑夢」の認知度は、性別で見ると、女性が1%水準で有意に高く、性別/年代別では、「女性 20 代」「女性 30 代」「女性 40 代」が1%水準で有意に高く、「男性 50 代」「男性 60 代以上」が1%水準で有意に低かった(表5-2)。

表 5-1 「国枝慎吾」の性別・年代別の認知度

		【国枝 慎吾(くにえだ しんご)】						
		全体	知っている	聞いたことがある	知らない	全体	車いすテニス	
[全体との差の検定]								
有意水準								
高								
低								
1%		▲ ▼						
5%		△ ▽						
10%		∴ ∴						
		全体	2,060	17.5	11.2	71.3	592	77.9
性別	男性	1,030	▲20.1	11.6	▼68.3	326	△81.6	
	女性	1,030	▼15.0	10.9	▲74.2	266	▽73.3	
年代別	20代	412	17.7	∴14.1	68.2	131	▼63.4	
	30代	412	∴20.9	▲15.0	▼64.1	148	75.7	
	40代	412	17.0	▽8.0	∴75.0	103	78.6	
	50代	412	17.7	∴8.7	73.5	109	▲88.1	
	60代以上	412	∴14.3	10.2	△75.5	101	▲88.1	
性別/年代別	男性20代	206	▲25.2	▲17.5	▼57.3	88	▽68.2	
	男性30代	206	▲24.8	∴15.5	▼59.7	83	81.9	
	男性40代	206	18.9	▼4.4	∴76.7	48	81.3	
	男性50代	206	17.5	8.3	74.3	53	△90.6	
	男性60代以上	206	14.1	12.1	73.8	54	▲94.4	
	女性20代	206	▼10.2	10.7	△79.1	43	▼53.5	
	女性30代	206	17.0	14.6	68.4	65	∴67.7	
	女性40代	206	15.0	11.7	73.3	55	76.4	
	女性50代	206	18.0	9.2	72.8	56	85.7	
	女性60代以上	206	14.6	8.3	∴77.2	47	80.9	

社会認知

社会認知

表 5-2 「成田緑夢」の性別・年代別の認知度

(%)

		【成田 緑夢(なりた ぐりむ)】					
		全体	知っている	聞いたことがある	知らない	全体	スノーボード
全体		2,060	29.2	21.7	49.1	1,049	84.1
性別	男性	1,030	▼21.9	21.7	▲56.3	450	82.4
	女性	1,030	▲36.4	21.7	▼41.8	599	85.3
年代別	20代	412	31.6	21.1	47.3	217	▼77.4
	30代	412	▲38.3	22.3	▼39.3	250	84.0
	40代	412	∴33.0	22.8	▽44.2	230	85.2
	50代	412	▼23.8	23.3	∴52.9	194	86.1
	60代以上	412	▼19.2	19.2	▲61.7	158	∴89.2
性別 / 年代別	男性20代	206	24.3	20.9	∴54.9	93	∴76.3
	男性30代	206	33.5	22.8	43.7	116	82.8
	男性40代	206	25.2	23.3	51.5	100	83.0
	男性50代	206	▼16.5	24.3	▲59.2	84	84.5
	男性60代以上	206	▼10.2	17.5	▲72.3	57	87.7
	女性20代	206	▲38.8	21.4	▼39.8	124	∴78.2
	女性30代	206	▲43.2	21.8	▼35.0	134	85.1
	女性40代	206	▲40.8	22.3	▼36.9	130	86.9
	女性50代	206	31.1	22.3	46.6	110	87.3
	女性60代以上	206	28.2	20.9	51.0	101	90.1

2) スポーツとの接点

日常生活のなかで、障害のある人とない人のスポーツを行う光景の関係性についてみると、障害のない人がスポーツを行う光景をみることがあるの方が、障害のある人がスポーツを行う光景をみることについて、1%水準で有意に高かった(表5-3)。

表 5-3 日常生活で障害のある人とない人がスポーツを行う光景の関係性

(%)

		日常生活で、障害のある人がスポーツを行う光景		
		全体	みることがある	みることがない
全体		2,060	9.4	90.6
日常生活で、障害のない人が、スポーツを行う光景	みることがある	1,348	▲12.9	▼87.1
	みることがない	712	▼2.8	▲97.2

3) パラリンピックの観戦形態

身近に障害のある人がいるかどうかでパラリンピックの観戦形態を分析すると、「自分以外の身近な人に障害者がいる」では、「テレビで中継番組を観た」「テレビのニュース番組で観た」「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」「(テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した」が1%水準で有意に高かった(表5-4)。

一方で、「身近に障害のある人はいない」では、「テレビで中継番組を観た」「テレビのニュース番組で観た」「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」「インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た」「(テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した」が1%水準で有意に低かった。

表 5-4 身近に障害のある人がいるかどうかでみるパラリンピックの観戦形態

(%)

		N	テレビで中継番組を観た	テレビのニュース番組で観た	テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た	インターネット動画で中継を観た	インターネット動画でニュース番組を観た	インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た	(テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した	テレビやインターネットで観戦しなかった
全体		2,071	32.8	45.6	11.2	1.7	3.1	1.3	0.6	38.6
あなたの身近に障害のある人がいますか。	自分自身が障害者である	53	32.1	43.4	7.5	3.8	5.7	△5.7	0.0	41.5
	自分以外の身近な人に障害者がいる	441	▲39.2	▲54.0	▲16.1	2.7	△4.8	△2.5	▲0.9	▼29.5
	身近に障害のある人はいない	1,577	▼31.1	▼43.4	▼9.9	∴1.4	▽2.5	▼0.9	▼0.5	▲41.0

4) パラリンピック観戦の感想

身近に障害のある人がいるかどうかでパラリンピック観戦についての感想を分析した。「自分自身が障害者である」では、「障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい」「障害者スポーツを直接観戦したい」「障害者スポーツを体験したい」「障害者と話したい、もっと知りたいと思った」が「よく当てはまる」において1%水準で有意に高かった(表5-5)。「自分以外の身近な人に障害者がいる」では、「障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい」「障害者スポーツを直接観戦したい」「障害者スポーツを体験したい」「障害者スポーツのボランティアをしたい」「アスリートとして非常に優れていると感じた」「障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた」「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」「障害者と話したい、もっと知りたいと思った」が「よく当てはまる」において1%水準で有意に高かった。

一方で、「身近に障害のある人はいない」では、「障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい」「障害者スポーツを直接観戦したい」「障害者スポーツを体験したい」「障害者スポーツのボランティアをしたい」「アスリートとして非常に優れていると感じた」「障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた」「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」「障害者と話したい、もっと知りたいと思った」が「よく当てはまる」において1%水準で有意に低かった。

表 5-5 身近に障害のある人がいるかどうかでみる観戦後の感想

	N	(%)				
		よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	
		<div style="border: 1px dashed gray; padding: 5px; display: inline-block;">                     [全体との差の検定]                      有意水準 高 低                      1% ▲ ▼                      5% △ ▽                      10% ∴ ∴                 </div>				
障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい	全体	1,272	6.7	37.4	43.3	12.6
	自分自身が障害者である	31	▲25.8	45.2	▽19.4	9.7
	自分以外の身近な人に障害者がいる	311	▲12.9	△43.4	▼34.1	∴9.6
	身近に障害のある人はいない	930	▼4.2	▽35.4	▲46.8	∴13.7
障害者スポーツを直接観戦したい	全体	1,272	4.6	21.4	53.8	20.3
	自分自身が障害者である	31	▲16.1	▲41.9	▽32.3	9.7
	自分以外の身近な人に障害者がいる	311	▲8.0	▲28.6	▽47.6	▽15.8
	身近に障害のある人はいない	930	▼3.1	▼18.6	▲56.2	△22.0
2020年東京パラリンピックを直接観戦したい	全体	1,272	9.3	25.9	44.9	19.9
	自分自身が障害者である	31	19.4	38.7	29.0	12.9
	自分以外の身近な人に障害者がいる	311	△13.2	△30.5	∴40.5	▽15.8
	身近に障害のある人はいない	930	▼7.7	▽24.2	∴46.6	△21.5
障害者スポーツを体験したい	全体	1,272	3.3	18.1	53.4	25.2
	自分自身が障害者である	31	▲16.1	29.0	∴35.5	19.4
	自分以外の身近な人に障害者がいる	311	▲6.1	▲23.8	52.4	▼17.7
	身近に障害のある人はいない	930	▼2.2	▼15.9	54.2	▲27.7
障害者スポーツのボランティアをしたい	全体	1,272	3.9	19.3	53.2	23.6
	自分自身が障害者である	31	△12.9	29.0	∴35.5	22.6
	自分以外の身近な人に障害者がいる	311	▲7.1	▲25.1	∴48.2	∴19.6
	身近に障害のある人はいない	930	▼2.7	▼17.3	△55.2	24.8
2020年東京パラリンピックにボランティアとしてかかわりたい	全体	1,272	3.6	15.9	51.8	28.7
	自分自身が障害者である	31	9.7	25.8	38.7	25.8
	自分以外の身近な人に障害者がいる	311	△5.8	∴19.3	49.2	25.7
	身近に障害のある人はいない	930	▽2.8	∴14.6	52.9	29.7
アスリートとして非常に優れていると感じた	全体	1,272	29.5	40.0	20.6	9.9
	自分自身が障害者である	31	∴45.2	32.3	19.4	3.2
	自分以外の身近な人に障害者がいる	311	▲37.9	40.8	▼14.5	▽6.8
	身近に障害のある人はいない	930	▼26.5	39.9	▲22.6	△11.1
障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた	全体	1,272	20.9	44.7	24.0	10.4
	自分自身が障害者である	31	∴35.5	41.9	19.4	3.2
	自分以外の身近な人に障害者がいる	311	▲27.7	45.7	21.5	▼5.1
	身近に障害のある人はいない	930	▼18.3	44.4	24.9	▲12.4
障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた	全体	1,272	15.1	46.4	28.8	9.7
	自分自身が障害者である	31	△32.3	32.3	32.3	3.2
	自分以外の身近な人に障害者がいる	311	▲23.2	46.0	25.4	▼5.5
	身近に障害のある人はいない	930	▼12.0	46.9	29.8	▲11.3
障害者と話したい、もっと知りたいと思った	全体	1,272	8.2	33.9	44.9	13.1
	自分自身が障害者である	31	▲25.8	38.7	32.3	3.2
	自分以外の身近な人に障害者がいる	311	▲15.4	37.6	▽39.5	▼7.4
	身近に障害のある人はいない	930	▼5.6	∴32.4	△46.9	▲15.2

身近に障害のある人がいるかどうかで障害のある人がスポーツを行う光景をみることがあるかについて分析すると、障害のある人がスポーツを行う光景をみることは、「自分自身が障害者である」では24.5%、「自分以外の身近な人に障害者がいる」では20.2%、「身近に障害のある人はいない」では、6.0%であった（図5-1）。

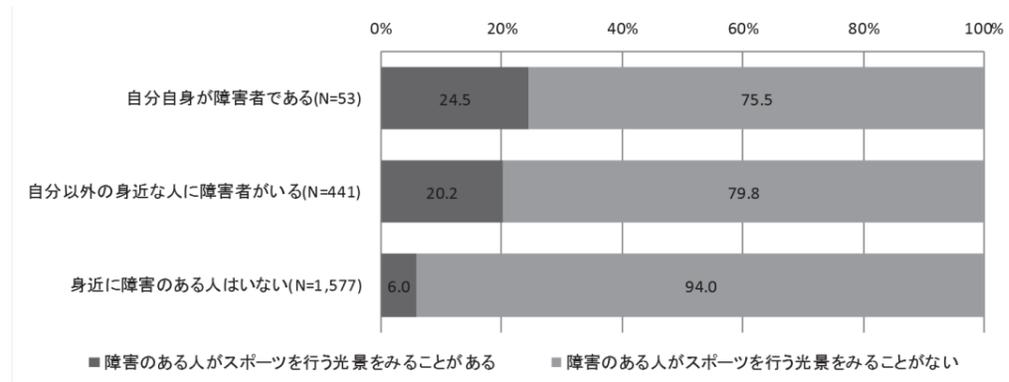


図5-1 身近に障害のある人がいるかどうかでみる  
障害のある人がスポーツを行う光景をみることの有無

日常生活のなかで、障害のある人がスポーツを行う光景をみるかどうかで大会の観戦形態について分析すると、全項目で、日常生活のなかで障害のある人がスポーツを行う光景をみる人の方が、パラリンピックをテレビやインターネットで観た人が多く、「テレビのニュース番組で観た」以外の項目で有意差がみられた（表5-6）。

表5-6 日常生活のなかで障害のある人がスポーツを行う光景をみることの  
有無別にみる平昌2018パラリンピック大会の観戦形態

観戦形態	N	（%）								
		テレビで中継番組を観た	テレビのニュース番組で観た	テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た	インターネット動画で中継を観た	インターネット動画でニュース番組を観た	インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た	（テレビやインターネットの）その他の方法で観戦した	テレビやインターネットで観戦しなかった	
全体	2,060	32.8	45.6	11.2	1.7	3.1	1.3	0.6	38.6	
あなたは日常生活のなかで、障害のある人がスポーツを行う光景をみますか。	ある	194	△40.2	43.8	△16.0	▲10.3	▲10.8	▲5.7	▲4.1	▽29.9
	ない	1,866	▽32.0	45.8	▽10.7	▼0.9	▼2.3	▼0.9	▼0.2	△39.5

[全体との差の検定]  
有意水準 高 低  
1% ▲ ▼  
5% △ ▽  
10% ∴ ∴

## 6. まとめ

2016年度に実施したYMFS「パラリンピアンに対する社会的認知度調査」では、調査当時、7社のテレビコマーシャルに出演し、年間グランドスラムを計5回も達成している「国枝慎吾」が「知っている」「聞いたことがある」を合わせた認知度で最も高かった。本調査では、リオ大会に出場した選手、平昌大会に出場した選手の認知度をそれぞれたずねた。

リオ大会に出場した選手のなかで、大会終了から2年が経過した今でも、最も認知度が高かったのは、変わらず「国枝慎吾」であった。「国枝慎吾」をはじめ、「上地結衣」「成田真由美」「一ノ瀬メイ」と認知度調査の上位陣の顔ぶれは変わっていないが、総じて減少傾向にあった。そのなかで、2.7ポイントの増加傾向を示したのが「山本篤」である。「山本篤」は、リオ大会に続き、平昌大会でも「スノーボード」日本代表としてパラリンピックに出場した。2020年東京大会の開催が決定した2013年以降、夏季大会（リオ大会・2016年）、冬季大会（平昌大会・2018年）に出場した唯一のパラリンピアンであり、リオ大会では、陸上競技で走り幅跳び・銀メダル、400mリレー・銅メダルを獲得した。その後も、平昌大会の開催前後で継続的にメディア出演したこともあり、認知度が向上したと推察できる。

なお、本調査における「山本篤」は、リオ大会と平昌大会に出場したパラリンピアンとして、両大会の調査対象者として名前が挙がっているが、リオ大会の認知度が8.3%（「知っている」2.1%、「聞いたことがある」6.2%）、平昌大会の認知度が6.9%（「知っている」2.6%、「聞いたことがある」4.3%）と、同一人物ながら誤差が生じていることがわかる。調査回答者のなかには、調査対象一覧に並んでいる他の選手名に想起されて回答していることも考えられ、そうした回答者のなかには、リオ大会と平昌大会の「山本篤」を別人物として認識しているケースも考えられる。

平昌大会に出場した選手のなかで、最も認知度が高かったのは、「成田緑夢」の50.9%（「知っている」29.2%、「聞いたことがある」21.7%）で、ついで「村岡桃佳」の9.6%（「知っている」3.6%、「聞いたことがある」6.0%）、「南雲啓佑」の9.0%（「知っている」2.0%、「聞いたことがある」7.0%）であった。実施競技の正答率が最も高かったのは、「成田緑夢」（84.1%）で、ついで「村岡桃佳」（48.0%）、「森井大輝」（25.0%）と、上位3位はメダリストが占めた。平昌大会終了後に、メディアで取り上げられる機会が多かったことも影響していると考えられる。認知度を性別・年代別に分析すると、リオ大会で最も認知度が高かった「国枝慎吾」は男性20代～30代の認知度が有意に高かった。一方で、平昌大会で最も認知度が高かった「成田緑夢」は、前述のとおり過半数で認知され、特に女性20代～40代の認知度が有意に高かった。

パラリンピックの観戦形態を経年でみると、「テレビで中継番組を観た」「インターネット動画で中継を観た」「インターネット動画でニュース番組を観た」「インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た」が、2014年度、2016年度、2018年度と増加傾向にあった。インターネット動画による観戦が増加しているのは、選手自身が情報発信できるソーシャルメディアが世間に浸透していることが一因だと推し量ることもできる。

観戦種目をみると、前回調査では「水泳」（41.1%）が最も多く、ついで「車いすテニス」（40.1%）、「陸上競技」（32.6%）であった。平昌大会では、「スノーボード」（49.8%）が最も多く、ついで「アルペンスキー」（34.7%）であった。冬季大会の種目数は夏季大会に比べて、限られているとはいえ、観戦者の約半数が「スノーボード」を観戦したのは、「成田緑夢」の活躍と無縁とは言えないであろう。観戦はしたが、観戦種目が「わからない」と回答した人も約3割おり、前回調査（15.2%）よりも、観戦が“受動的”になったことを示唆している。

平昌大会観戦後の意識変容については、前回調査からの変化はみられなかった。YMFS[テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査]（2016年度）でも明らかになったように、東京2020大会の開催が決定した2013年を境に、テレビメディアにおける「障害者スポーツ」「パラリンピック」の放送時間は急増している。その一方で、それらを観戦している人の意識にそれほど大きな変化がみられないのは、多くの人が観戦していない、または関心を持って観戦している人が少ないことが推察でき、2年後に控えた東京大会に向けては、不安要素の一つと言えるだろう。

（小淵和也）

【参考】平昌パラリンピック 日本人メダリスト一覧

NO	氏名	競技名	メダル
1	村岡桃佳	女子大回転(座位)	金
2	村岡桃佳	女子滑降(座位)	銀
3	村岡桃佳	女子回転(座位)	銀
4	村岡桃佳	女子複合コンビ(座位)	銅
5	村岡桃佳	女子スーパー大回転(座位)	銅
6	成田 緑夢	男子バンクドスラローム(LL2)	金
7	成田 緑夢	男子スノーボードクロス(LL2)	銅
8	新田 佳浩	男子10kmクラシカル立位	金
9	新田 佳浩	男子1.5kmクラシカル立位	銀
10	森井 大輝	男子滑降(座位)	銀

笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所  
主任研究員 小淵和也

平昌大会に出場した選手の認知度をみると、成田緑夢選手の「一人勝ち」が明らかになった。成田選手を「知っている」(29.2%)と「聞いたことがある」(21.7%)を合わせると回答者の過半数が成田選手を認知していた。また、表1-2の結果から、成田選手の実施競技がスノーボードだと認識している人も84.1%と非常に高く、多くの人が『スノーボード選手・成田緑夢』を認知していることがわかる。平昌大会をテレビやインターネットなど何らかのメディアで観戦した人と観戦しなかった人に分類して『スノーボード選手・成田緑夢』の認知度をみると、観戦した人は86.2%、観戦しなかった人は77.7%であった(図7)。注目は、平昌大会を観戦しないにもかかわらず、『スノーボード選手・成田緑夢』を77.7%の人が認知していることである。平昌大会に出場した選手のなかで、観戦しない人の認知度が約8割となったのは成田選手のみにみられた傾向であり、成田選手が「障害者スポーツ」「パラリンピック」の枠に留まらずに、メディアで取り上げられていたことが推し量られる。

その要因を成田選手の生い立ちや取り組みなどから探してみたい。成田選手は、熱血指導で有名な父親に育てられ、兄と姉はスノーボード競技でトリノ・オリンピックに出場した成田童夢さんと今井メロさんである。成田三兄弟の末っ子として、幼少期からメディアの前に登場する。成田選手本人もトランポリンで全国大会優勝、2012年ロンドン・オリンピックでは、日本代表の最終選考まで残った。同年には、フリースタイルスキー世界ジュニア選手権・ハーフパイプで優勝を飾るなど、日本のトップアスリートとして活躍を始めた頃であった。その練習中の事故で重傷を負い、左足切断の可能性、歩ける確率20%との診断を受け手術を繰り返した。結果、左膝下の感覚を失う。本人曰く“一番落ち込んだ”時期を過ごすことになる。

その後、自身の目標をパラリンピックに設定してからの動きが非常に興味深い。自らでトランポリン教室を開いて収入を得て、スポンサーも自らで探す。世間がイメージする障害者像を次々に塗り替えるような行動で、周囲の固定概念を変えていったのである。平昌大会が近づくと、メディアは、“成田三兄弟の末っ子がパラリンピックを目指す。なぜ障害者になったのか?”に注目する。リハビリテーションの一環で始めたスポーツで、誰かを励ませられるかもしれないと感じ、パラリンピックで夢や希望を与えられる選手になりた

いと決意した成田選手は、メディアからのプレッシャーを真摯な対応で追い風にしようとして、ソーシャルメディアを駆使し、海外で出場した大会終了後には、テレビ電話を通して自ら記者会見を開くなど、積極的な情報発信を行った。平昌大会出場からの金メダル獲得までの過程を“アスリートYouTuber”として動画配信を続けた。これまでになかった情報発信に加えて、成田三兄弟への興味も相乗効果となり、注目度は一気に増した。

図表3で平昌大会の観戦形態についてたずねたが、「インターネット動画で中継を観た」「インターネット動画でニュース番組を観た」「インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た」が2014年、2016年、2018年と、いずれの観戦形態でも増加傾向にあった。幅広い世代でインターネット利用が日常的になった昨今の社会環境も、“アスリートYouTuber”にとっては追い風になったであろうと推察できる。

ソーシャルメディアなどを活用することで、テレビや新聞などのマスメディアを媒介せず、直接興味のある人に情報が届く時代となった。図表11で、20~40代の女性人気が高かったことも明らかになり、今まで「障害者スポーツ」「パラリンピック」に興味がなかった人たちが、純粋にコンテンツの面白さ、興味深さをきっかけに目を向け出したという点からも、“アスリートYouTuber”の果たした貢献度は非常に大きかったと言えるだろう。成田選手のアスリートとしてのストイックな姿勢に加えて、前述した様々な要素が絡み合い、人々は「成田緑夢」に接触する機会が増えていった。彼自身のたゆまぬ努力、取り組む姿勢を見聞きするなかで、人々は共感し、同じ目線、同じ気持ちでパラリンピックに“参加”した。その結果としての金メダル獲得となれば、熱狂が最高潮となったのは想像に難しくないだろう。

「成田緑夢の金メダルストーリー」は、すでに多くの人々を魅了したが、これで完結ならなかったのが、人々の期待をさらに膨らませてくれた。スノーボード競技から引退して、2020年東京大会をカヌー競技で目指すことを宣言したのだ。少なくともあと2年は、金メダルストーリーが紡がれる可能性が残ったのだ。人々を魅了し、メディアの注目を浴び、人々が応援したくなったのは、どん底を味わった成田選手が、苦労や挫折を乗り越えて、一気に頂点に駆け上がっていくという爽快なストーリーを完結させたからに他ならない。

パラリンピックやパラリンピアンへの世間の注目度は、過去に例がないほど高まっている。2020年東京大会に向けた社会環境の整備は着実に進んでおり、パラリンピック自体は大成功の予感を漂わせる。東京で開催される2回目のパラリンピックに求められるのは、“その先”である。パラリンピックを通して、我々はどのような社会変革を起こすことができるのか? 「成田緑夢の金メダルストーリー」は、障害者への偏見を根本から見直す大きな

きっかけになるはずである。多様性を認め合える社会を、自らの活躍で作っていけるヒーロー・ヒロインは、子どもたちの価値観にも大きな影響を及ぼすだろう。「障害者がいて当たり前な社会」が価値観として根付くためにも、ヒーロー・ヒロインは必要となる。これまでの足跡からも成田選手に、その役割を期待せずにはいられない。

成田緑夢	N	(A) 知っている	(B) 聞いたことがある	A + B	知らない	競技名	N	正答率
全体	2,060	29.2	21.7	50.9	49.1	スノーボード	1,049	84.1
テレビ、インターネット動画で観た	1,264	39.1	23.3	62.4	37.6		789	86.2
テレビで観た	1,223	39.4	23.4	62.8	37.2		768	87.0
インターネット動画で観た	83	36.1	26.5	62.6	37.3		52	71.2
その他の方法で観た	12	25.0	25.0	50.0	50.0		6	50.0
観戦していない	796	13.4	19.2	32.6	67.3		260	77.7

図7 成田緑夢選手の認知度と実施競技の正答率

参考文献等 (2018年7月31日時点)

成田緑夢Twitter: <https://twitter.com/gurimunarita>

近畿医療専門学校: <http://www.kinkiisen.ac.jp/narita/>

NHK SPORTS STORY:

[https://www.nhk.or.jp/sports-story/detail/20180317\\_2612.html](https://www.nhk.or.jp/sports-story/detail/20180317_2612.html)